

絵画の中のはきもの

ミシンの思い出

見 — 真理子

近頃はロボットが技能コンテストで競い合うニュースを耳にしたり、人間にそっくりなアンドロイドがテレビ番組に登場したり、機械と人との関係がどんどん進化していることに驚かされます。職場でも一人一人に設置された同機種のパソコンが使う人によってカスタマイズされてくると“阿吽の呼吸”というか、円滑なコミュニケーションが生まれてくるから不思議です。職人にとっても機械との間に眼に見えない交流があってこそ、思い描いたカタチを作り出せるのだと思います。

父の使っていた大きな機械はグラインダーとミシンです。グラインダーはひたすら父の受け身となって火花を散らし、ミシンは父と呼吸を一つにしてリズムカルによく働いてくれました。特にミシンは私自身も革の切れ端でポーチや手提げ袋を作った経験があって愛着があり、フォルムの面白さにも惹かれて私の作品によく登場しました。

店舗が木造だった頃、ディスプレイ用のウィンドウは環状七号線に面していました。或る日突然父がそのウィンドウの台部分を外してしまい、靴の代わりにミシンをデンと真ん中に据えて、歩道を行く人たちの目の前でパフォーマンスを披露したのです。目立ちたがり屋の父は煙草を燻らせ童話の主人公にでもなった気分、そしてミシンも綺麗に磨かれたボディに視線を受けて誇らしげに見えました。父にとってミシンは“絵”になる格好の相棒だったに違いありません。

ミシンといえば、今夏日比谷で上映された映画を観てきました。舞台はニューヨークの小さな靴修理店、先祖伝来の“魔法のミシン”によって主人公の人生がどんどん動いてゆくというファンタジーです。やはり“靴職人”と“ミシン”の間には物語になる何か魅力的な要素が存在するのだと嬉しくなりました。スクリーンに映し出される職人の手の動きや、棚に積み上げられた修理済の靴の紙袋など・・・何故かすごく懐かしい！！子供の頃に店番をしてお客様の紙袋が見つからず泣きたい気分で探した情景と重なって切なくなりました。

そう、我が家のミシンも“魔法”を使ってこっそり靴の在処を教えてくれたらすごく助かったのに・・・！！店の片隅にポツンと遺されたミシンを横目で見ると、ちょっと苦笑いしたように感じました。



ミシンをかける父を描いた「暮れる」